

大会企画パネルセッション

「学習力を育てる日本語教案集」の教材とは

—教科との接点をどう考えるか—

田中 薫（とよなか JSL）

1. 教材の背景

教材は担当した中学生から教えられて育ってきました。最初に理念や拠り所になる理論があっただけのものではなく、まず、個々の生徒が何を学んでいて、何ができていないかを分析し、何を教えるのか決めるところから始まりました。例えば「普通の日本語教えて！『～ですか？』では相手にしてもらえないし、辞書も引けず、友達の言っていることが分からない。」という訴えから常体指導を早期に取り入れるようになり、大人の初級教材ではゆっくりすぎて学校で友達から学ぶ言葉の勢いに追いつかないことも知らされました。このように生徒が希求する声に合わせて順序立てし、短期間に学習する力と自信をどのように付けるかということ課題にしてきました。

教案集は、その後ボランティアの仲間と一緒に指導する機会を得、小学生にも応用でき、指導初心者にも教材を活かせるように改良を重ね、90分×週3回、平均1年間で自力学習ができる力を付けるための主要教材に絞ったものです。

2. 教材の特徴と考え方

教材はカリキュラムと切り離せません。そこで、基礎を身につけ日本語での学び方を習う段階を初級、考えること・自分の力で解決する力をつけることを目指す段階を中級と設定しています。しかし、カリキュラムは個々の子どもの力量や既習状況に合わせ、柔軟に動かせることが必要です。また、指導者の力量や使い慣れた教材との比較から、どこからでも組み入れることが可能な教材となる工夫も必要です。そのためには、その教材が必要か否か該当する課のテストでも確認できることが望まれます。

教材は文の構造と語彙量を大切にしています。その理由は、授業がわかるということと自分の思いを話せるということが必ずしも一致しないからです。聞ける授業の内容が書けるといふところまで到達して、理解が深まります。テスト問題も教科書も読めるためには簡単な日本語の文型だけではなく、どういう文の構造の中に文型が組み込まれているのか理解してこそ聞き取れ、豊富な語彙量・漢字量を持ってようやく書けます。初級の間に教科の基本学習を整えれば教科書を使って予習ができ、授業の説明も聞けるようになります。

3. 初級教材の考え方

初級の要点は「聞く・話す・読む・書くことを連動し、一気呵成に覚えられること」「日本語の構造の基礎をしっかりと身につけること」「長い文に早く慣れ親しむこと」この3点です。

そのために指導者側がすべきことは、言語の構造を分析し、整理し、組み立て直して無駄な説明を一切省き、普通で話しかける方法で教えることです。そうすれば、子ども達

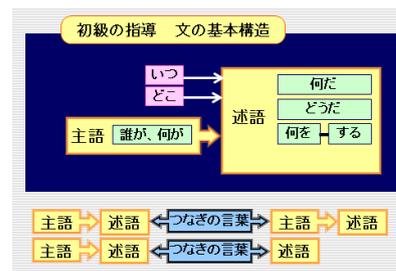


図 1. 初期教材の指導内容

自身がその手法を学びます。リズムと速度が子どもを集中させる鍵となり、それまで勉強に縁遠かった子どもも、覚えるという作業に慣れます。また、漢字トランプカードなどゲームの導入で熟語を楽しむ経験を取り入れています。

教科との関係は、各科の基本となる学習内容との接点を探し、応用練習に取り入れることに努めます。つまり、教科に近づくために教材が果たす役割は、まず多量の語彙を組み立てて使える素地を子どもに浸透させる指導法にあると言えます。重視してきたことは下記表1の通りです。

表1. 初期の段階で重視してきたこと

要点	重視する内容	教科との関係
文構造の基礎の把握	主語と述語の関係をしっかり把握する	文意の理解
学習力を伸ばす要素を早期に学習	文のつなぎ方 時との関係の理解、 語彙を増やすコツなどの会得	授業の聞き取り 順序・経過感覚 かな・漢字の読み書きへの慣れ
目標を明確にする	授業内で評価につながる指導	授業の要点把握
知識・理解の拡大に関心を高める	日本語で教科学習にも近づきやすくする指導	教科の基本となる語彙と文型の合体
書くことを早期開始	辞書に親しむ 日記・作文に慣れる	自己学習の芽を育てる 考えを述べる習慣

#### 4. 中級教材の考え方

中級では習うということより、自ら考え、分析し整理し・自力で解決する力を付けたいのです。教科への近づきは初級から可能な限り取り入れますが、最終目的ではありません。教科も詰まるところ個人が考える力を付けるためのものですから。教科も考えを広げる言語の一部でしかないと思います。ここではそれぞれの教科の語彙を重視するのではなく、学習力を高めるために各教科の教科書を利用しているといった方が適切かもしれません。

そこで、中級教材では動詞の諸相と修飾用法、話し手と聞き手の関係などを中心に据え、表現の深まりを持たせられることを自覚できるように組み立てています。

中級では「基本の誤りを正そうと意識すること」「自分で見つけ考えようとする」「調べること・読むこと・書くことを厭わないこと」を大切にします。

中級のスタートは動詞ですが、テ形から入らず過去形「タ形」で100種以上の絵カードの動詞を現在形・常体から過去形・常体に変換する課程で、教わるのではなく、

規則性や法則を発見し馴染むのです。自他動詞の指導も同様です。理科の教科書から動詞を拾い出し、自他動詞の法則を学習者自身が発見する方法です。自他動詞の複雑な理解は国語・社会科でも主語の理解に必要です。読解では文の構造を、文作りでは子どもの発想をよりの確に伝える方法を、指導者は子どもと共に考えながら進めるようにしています。

#### 5. 教材と教科の関係で大切にすること

知らないことが出てきたらどこまで戻るかを知ることが課題です。日本語も教科もその基礎こそ大切にされるべきです。相互の言語事項がどう関わっているかを知れば、理解は徐々に深まり、広まります。子ども自身の考えはそこから飛躍できると信じています。

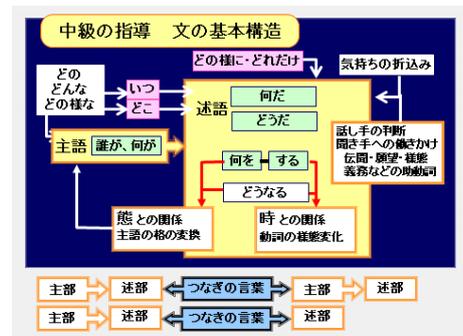


図2. 中期教材の指導内容